

光源氏像の変容

——朝顔巻・玉鬘十帖を中心に——

余 田 充

一、はじめに

須磨、明石での流謫を経た源氏が、許されて帰京した後は、新冷泉帝の後見となり、再び昔日の権力の座に戻る。六条院の極楽浄土を構築すべく、栄華への階梯を登り始めるのである。その階梯では、昔を回顧・回想する源氏が強く描かれ、昔の今に於ける意味が問われる。作者は源氏に昔を回想させるべく、当時と相似た状況を新たに設定して、源氏の反応を描いているのである。例えば、藤壺中宮亡き後、傷心の源氏が懸想するのは昔の女性六条御息所の娘・秋好中宮であり、ここで源氏のあながちな恋が語られる。更に、かつての女性朝顔君が齋院を下りると、彼女に対しても執心した。又、玉鬘十帖で語られるのも、かつての女性夕顔の娘・玉鬘に対する源氏のあながちな恋であった。

本稿では、朝顔君・玉鬘の二人に限って、彼女らとの関係を通しての源氏の変容のさまを次の三点から考えてみる。先ず、朝顔君と

の恋の復活を通して見られる源氏の回顧の姿勢はどの様に描かれているか。次に、玉鬘十帖で見られる源氏の老いと若さとはどの様に描かれているか。更に、それと関連して源氏の行動力・冒険心はどの様に描かれているか。以上の三点から考えることにする。そして最後に、それらの若菜巻以降への影響についても触れてみたい。

二、回顧の姿勢——朝顔君と

朝顔君の父式部卿宮が亡くなり、その御服により朝顔君は齋院を下りることになる。彼女の登場は賢木巻以来七年ぶりのことで、朝顔巻冒頭はそれを次の如く語る。

齋院は、御服にて、おりる給ひにきかし。おとゞ、例の、おぼしそめつる事絶えぬ御癖にて、御とぶらひなど、いと繁つきこえ給ふ。(朝顔巻)

これは、七年前齋院に卜定された朝顔君を「わりなう思さば、さもありぬべかりし年頃は、のどかに過ぐい給ひて、今は、悔しう思は

さるべかめるも、あやしき御心なりや」(賢木33)と語られた、源氏のあの好き心の復活である。

さて、昔の女性朝顔君との恋の復活の中で、過去を振り返る源氏の姿を捉え、その姿のさまを見てみたい。

源氏は、女五宮の見舞を口実に朝顔君を訪問するが、彼女は源氏の熱情に対して冷淡であった。「今は、なにのいさめに、かこたせ給はんとすらん。なべて、世にわづらはしき事さへ侍りし後、さまざまに思ひ給へあつめしかな」という源氏の述べた懐懐に対して、作者は「昔よりも、今少し、なまめかしき気さへ、添ひ給ひにけり」と、昔に交らぬ若さを強調する。つまり、源氏は今なお好き心が旺盛なのである。だが、しかし、冷淡な朝顔君を口説く源氏の言葉「齡のつもりには、おもなくこそなるわざなりけれ」には判然と年齢の自覚が見られた。作者の語る源氏は今なお若い、源氏自身のもたらす言葉には年齢の自覚がある。我身の年齢を自覚する源氏は、若かりし往時を回顧する。翌朝、朝顔の花を添えて贈った歌「見しをりの露わすられぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらん」には、昔を今に取れもどししたいとする過去への強い志向がある。昔を今に――七年前雲林院に籠った源氏が斎院へ送った消息「かけまくはかしくこれどもそのかみの秋思ほゆる木綿繻かな『昔を今に』と、思ひ給ふるにもかひなく、とり返されむものやうに」にも、昔を今に取りもどししたいとする源氏の気持は語られていた。この様に、重層的に語られる源氏の過去への志向は、彼にいやがうえにも自らの年齢を意識させる。もう少し見てみよう。

雪のちらつく黄昏時に、女五宮の見舞にかこつけて、源氏は再度桃園邸を訪問する。そんな彼が眼前に見たものは、年月の作用を受

けた古びた世界であった。荒れ果てた邸は人少なで、年老いた御門守の他には男は居なかった。この男が錆びついた錠を開けるのを待っている時、源氏は思わず遠い自らの過去を振り返って感慨をもちます。

昨日・今日とおぼす程に、三年のあなたにもなりにける世かな。かゝるを見つゝ、かりそめの宿りを、え思ひ捨てず、木草の色にも心を移すよ。(朝顔23)

「三年のあなたにも……」には、桐壺院崩御以来の自分の半生を回顧する源氏の感慨が込められている。朝顔巻の巻頭近くに「故院の、このみこたちをば、心殊に、やむごとなく思ひ聞え給へりしかば、今も親しく、つぎ／＼にきこえかはし給ふめり」と、故桐壺院・女五宮・光源氏の親密関係の説明があり、それを受けて、女五宮と源氏との昔話は展開する。昔話は、今は亡き桐壺院の追憶に明け暮れる。女五宮が「院のうへ、かくれ給ひて後、よろづ、心細くおぼえ侍りつるに……」と寂しい境遇を語り源氏の来訪を喜んだのに対し、源氏も「院、かくれ給ひて後は、さまざまにつけて、同じ世のやうにも侍らず」と、桐壺院在世時と異なる現在の自分を語る。その中で源氏は須磨明石退去時代のことも回想しているし、女五宮は「いと清らに、ねびまさり給ひにけるかな。童にもし給へりしを、見たてまつりそめし時、『世に、かゝる光の出でおはしたる事』と、おどろかれ侍りしを……」と、源氏の幼少時代の回想にまで及んでいる。二人は過去へ過去へと押し戻され、そうすることによって現在を確認しているのである。「木草の色にも」には、朝顔君への恋心の反省がある。先に、桃園邸を再訪問する際の源氏のもって回った言い繕いに、女房達が「いでや、御すき心の古りがたきぞ、あたら、

御庇なめる」とつぶやいて批難し合う場面があった。周囲の者にはなお源氏の好き心の旺盛ぶりが目に留まるのだが、源氏自身は逆に、好き心に対する反省が見られる。つまり、源氏は外見の若さに拘らず、内面においては徐々に変容しつつあるのだ。

御門守の姿にふと我に返った源氏は、次に源内侍と邂逅する。彼女は紅葉賀巻の終りに登場した時は「五十七八の人」であったから、現在は既に七十か七十一才、これも又過去の再現である。源内侍は、「院のうへは、『祖母おとど』と笑はせ給ひし」と名のり出る。この声を聞き、源氏は彼女が女五宮の許に身を寄せてまだ生きていたことを知り驚く。ここでも昔話に花が咲き、「その世の事は、みな、昔語りになりゆくを。はるかに思ひ出づるも、心細きに、うれしき御声かな」と源氏は述懐している。「その世の事」、即ち桐壺院在位時代を追憶するのである。

このさかりにいどみ給ひし女御・更衣、あるいは、ひたすら亡くなり給ひ、あるいは、かひなくて、はかなき世にさすらへ給ふもあべかめり。入道の宮などの御よはひよ、「あさまし」とのみおぼさるゝ世に、年のほど、身の残りすくなげさに、心ばへなども、物はかなく見えし人の、生きとまりて、のどやかに行ひをもうちして、過ぐしけるは、猶、すべて、定めなき世なり。(朝顔26)

源内侍が内侍として勤めた桐壺院在位時代に寵を競っていた女御・更衣は既に遠い昔に亡くなり、或いは生きていても見るかげもなく落魄している。あの入道の宮も三十七才の若さで亡くなった。それに引きかえ、当時それ程目立たなかった源内侍は今こうして生き残っている。桐壺院在位時代の人々の行く方を追ってみると、源氏は

時、流れを意識せざるを得なかったのである。

朝顔巻には二つのタイプの老女、女五宮・源内侍が登場するが、彼女達は源氏と関わり合うことで、いづれも源氏を桐壺院在位時の遠い過去へ溯及させる役割を果たしている。そして、源氏に世の定めなきをも自覚させるのであった。

先に見た様に、源氏の懸想は「例のおぼしそめつる事絶えぬ御辭」から発したものであり、思いを遂げないままでは「えやむまじくおぼさるれば、さらがへりて、まめやかにきこえ給ふ」という体のものであった。それに対して、朝顔君は相変らず源氏に靡く気色を見せなかった。「昔お互いに若かった時でさえ結ばれなかったのに何で今さら……」と源氏の求愛を受け入れないのである。一方源氏は「空しからむは、いよ／＼人笑へなるべし。いかにせむ」とますます逸り、二条院を離れがちになって、紫上の嫉妬を誘うことになる。

おとどは、あながちに、思し入らるゝにしもあらねど、つれなき御気色のうれたきに負けてやみなむも口惜しく……

源氏は拒まれて一層意地になるのであった。(朝顔26)

藤壺の一周忌も過ぎて祭の時節が来る。源氏の朝顔君に対する関心はさめず、折々の音信も続け、贈り物もして、相変らずに懸想する。故父宮も源氏を婿にしたい意志だったし、葵上亡き今は女三宮への遠慮もなくなった。すべてを考慮した上で女五宮は二人の結婚を勧めるが、それでも朝顔君の気持は変らなかつた。彼女はその登場以来、始終「つれなき御気色」の「ふりがたくなおなじさま」なる女性として設定されてきたが、彼女との恋の復活譚の結末は、次の様に語られる。

かの、御みづからは、わが心を尽くし、あはれを見え聞えて、人の御気色の、うちもゆるばん程をこそ、待ちわたり給へ、さやうに、「あながちなるさまに、御心破りきこえなん」とは、思さざるべし。(乙女27)

あつけない慕切れだが、これを朝顔巻冒頭と比較すれば、源氏の姿容は一目瞭然である。「おぼしめつる事絶えぬ御癖」はもはや失せてしまつて源氏は変容してしまつた。いい年をして世間の非難を受けまいとする中年の分別心によつて、自制されているのだ。帚木巻冒頭で語られた、あのあやにくな「癖」は影をひそめてしまつた。かつての好き心は衰えたのである。今迄、好き心の衰えは、源氏自身の話文・心話文の中で、反省・回想・弁解という形で述べられていた。この場面は、外から見た作者が源氏の心中を推量する形で説明されており、その為には源氏の変容ぶりは一段と鮮明さを増している。若き日の好き心を反省し、時の流れ・老いを意識し、世の定めなさを自覚し始めた源氏：朝顔君との恋の復活譚は、以上の如く源氏の変容を如実に示すものであつた。

三、「老い」と「若さ」と―玉鬘君と

とし月へだゝりぬれど、あかざりし夕顔を、つゆわすれ給はず、心々なる人の有様どもを、見たまひ重ぬるにつけても、「あらましかば」と、あはれに、口惜しうのみ思しうづ。

(玉鬘39)

玉鬘巻は、昔の女性夕顔を源氏が追憶する描写から書き起こされ、その遺児玉鬘のその後の運命を語る。即ち、玉鬘が夕顔失踪後、乳

母の養育を受け筑紫に伴われて成長したこと。乳母の夫少弐が病死した後、その地の豪族大宰将監の脅迫的求婚を辛うじて逃れたこと。帰京後は開運のため初瀬へ参詣し、偶然かつての侍女右近に巡り逢い、彼女の媒で源氏の許に身を寄せる様になつたこと―等の顛末を長々と語っている。夕顔が横死したのは、今からもう十八年余り昔のことで、当時源氏は十七才であつた。その間のプランクを以上の様に走り書きをし、玉鬘の六条院入りの準備が忙しい頃、「かくいふは、九月のことなりけり。わたり給はむ事は、すが／＼しくも、いかでかはあらん」と語られ、玉鬘の物語が六条院物語の一部としてはめ込まれてくる。

玉鬘を引き取る源氏の意図は、右近に語る言葉「すき者どもの心、つくさするくさはひにて、いと、いたくもてなさむ」に端的に示されていた。それに則り、發兵部卿官・鬚黒大将・柏木等がその候補者として登場し、彼女をめぐつて物語は展開する。それ故、この物語を、玉鬘をめぐる一連の完結性のある求婚譚と一応考へることも出来よう。なぜならば、第一に、行幸巻で玉鬘の装束の日内大臣の君達が源氏を評した言葉「さま異なる、おとゞの御好みどもなめり」が、先程の「すき者どもの心、つくさするくさはひ」にしようとする源氏の意図と前後照応しているからである。又、第二に、藤袴巻末尾で、多くの懸想人に最後まで慕われつゝ田滿裡に出仕しようとする玉鬘に対して、源氏と内大臣が「女の御心ばへには、この君をなむ、本にすべき」と結論を下すことが述べられており、玉鬘の登場の役割の終結を意味すると考えられるからである。

しかし、玉鬘をめぐる求婚の物語は、玉鬘個人の苦悩を描く為にのみ設定されたものではない。玉鬘を後見する養父としての立場と

昔の恋人のゆかりを懐しむ懸想人の一人としての立場との間を、逡巡したゆたう源氏の像の方が強く浮き彫りにされているからである。

この逡巡したゆたう源氏を見る前に、先ず源氏の老いの意識から見てみたい。朝顔巻に見られた源氏の年齢の自覚・老いの意識は、四十賀を直後に控え、ここでは更に深化したものとなっているからである。

大夫監の求婚を拒絶し逃げて上洛した玉鬘は、その後開運のため初瀬に参詣し、偶然右近に巡り逢う。右近はさっそく源氏に玉鬘の健在を報告すべく仄めかす。源氏は右近の話の続きを聞く為、彼女を「御足まるり」に召して次の様に語る。

若き人は、「苦し」とて、むつかるめり。なほ、年経ぬるとちこそ、心かはして、睦びよかりけれ。(玉鬘356)

勿論、戯れの言葉だが、その中に源氏の年齢の自覚は読みとれる。

常夏巻の初め、六条院の東の釣殿で納涼の折、やって来た内大臣の子息達に源氏が語る言葉、

なにとなく、翁びたる心ちして、世間の事も、おぼつかなしや。(常夏12)

また、彼等と近江君の噂をした後、退出し難く思う若者に対して気を効かせて語る言葉、

心やすく、うち休み、涼まむや。やう／＼、かやうのなかに厭はれぬべき齡にもなりにけりや。(常夏14)

など、いずれも柏木や弁少将等を前にしての戯れの言葉だが、ここには自らを若い世代と分つ源氏の姿がある。

篝火巻の終り、玉鬘に和琴を教えた源氏は、彼女と琴を枕に共寝

し唱和する。その後、夕霧や柏木等と呼び寄せて一緒に合奏した。御簾の奥では玉鬘もこれ聞いてる。

さかり過ぎたる人は、酔ひ泣きのついでに、しのばぬ事もこそ。(篝火42)

「さかり過ぎたる人」は、言はずがな的事まで言いそうだとの不安を源氏は抱いている。「しのばぬ事」とは、源氏の玉鬘に対する懸想心や、玉鬘が柏木達と兄妹である事を指す。ここに、老いと好き心の関係が見える。老いによって好き心が衰退した源氏の言葉である。

行幸巻、「世もいと常なきを」と思う源氏は、玉鬘の事を打ち明けたいので大宮の病氣を見舞う。大宮の招きで来邸した内大臣と久しぶりに対面した源氏は、「昔の事おぼし出でられ」て、「昔今のことゞも」の話をする。

末の世となりて、そのかみ思うたまへし本意なきやうなる事、うちまじり侍れど、うち／＼のわたくし事にこそは。大方の心ざしは、更に移るふことなくなむ。何ともなくて、積り侍る年・齡にそへて、いにしへのこと、恋しかりけるを。(行幸81)

この源氏の挨拶に、内大臣も打ちとけ、これを機会に源氏は玉鬘の事をほのめかした。そして、かの遠い昔の「雨夜の品定め」を懐しく思い出すのである。かくして、過去の思い出への回帰によって二人の気持は通じ合い、物語は玉鬘の装着へと展開してゆく。

以上、今迄見てきた源氏自身の老いが述べられているのは、すべて源氏自身の会話文である。つまり、源氏の老いは彼のみが内面意識しているものとして描かれているのであって、彼以外の第三者

は決して源氏の老いについては言及してはいない。第三者から見ればなおかつ源氏は「若く清げな」人物として捉えられているのである。

そこで、今度は源氏の若さが描かれている場面を追ってみる。

胡蝶巻、衣更えの頃、玉鬘の許に集まった懸想文を源氏が見て、返事に対する注意を彼女に話して聞かせる。この二人の様子を見て右近は、

おやと聞えんには、似げなう若くおはしますめり。さしなら
び給へらんしも、あはひめでたしかし。(胡蝶45)

螢巻、端午の日、玉鬘方へ渡った源氏が、螢兵部卿宮をほめたりけなしたりして玉鬘に注意を与えている様子を、

活けみ殺しみ、いましめおはする御さま、つきせず若く清げ
に見えたまふ。(螢42)

と、作者は語る。年齢・容姿だけではない。御衣の色あい・衣裳の模様・薫りなども、玉鬘の心中を借りて「おもふことなくは、をか
しかりぬべき御有様かな」と、作者は讚美称揚している。

野分巻、夕霧が風の見舞の折、紫上を垣間見る例の有名な場面の後、明石姫君の方から戻ってきた源氏が紫上に語りかける様子を、

おやとも思えず、わかき清げに、なまめきて、いみじき、御
かたちのさかりなり。(野分47)

と、作者は語る。

源氏の使いとして秋好中宮の慰問に行った夕霧は、中宮に源氏の消息を伝えた後、帰って復命する。しかし、源氏はなおお氣掛りなので自ら中宮を見舞う事にして準備する。着替えの折の源氏の心中を、わが御顔は、「古りがたく、よし」と、見給ふべかめり。(野

分55)

と、作者は推量して述べる。

その他、かつて六条院が完成し、御方々が移り住んだ折、中宮と紫上との唱和を見守る源氏は「いと若やかに、つきせぬ御有様」(乙女35)であったし、玉鬘を六条院に迎えた源氏は「いと、めづらかに、恐ろしうさへぞ思ゆるや」(玉鬘35)と筑紫人の目を通してその美が語られていた。

又、学才・芸能に関しても、六条院臨時客の折の有職者を庄倒した源氏は、

とりはなちては、有職多くものしたまふ頃なれど、御前にて
は、けおされたまふ、わろしかし。(初音33)

と、礼讃されていた。

この様に、源氏の年齢的若さ・容貌・風采の美、学才・芸能の卓越性の描写は、すべて地の文や登場人物の心語文を通して述べられているのである。

光源氏の老いは彼の会話文・消息文を通して語られ、彼のみが内面で意識しているものとしてのみ描かれていた。一方、他の登場人物など第三者が外から眺めた場合は、依然として「若く清げな」人物として設定されている。この様な老いと若さの描き分けは、源氏に老いと若さの両者が混在していること、換言すれば四十歳の賀宴を控えた源氏に老いがしのび寄って来たことを意味する。光源氏を外面からと内面からと別々に描き分けるというアンバランスな描き方は、当然光源氏の意識の問題としてでなく、行動力の問題と関係してくる。その意味で、次に光源氏の行動面・冒険心について考えてみたい。

四、行動できぬ源氏―たゆたい

夕顔への追懐の情は、玉鬘への懸想へと交って行く。玉鬘を昔時の夕顔と比較し、源氏の情はつるばかりであった。胡蝶巻に至って、玉鬘に対する源氏の関心は急速に深まり、自分を母君と思えだの、養父を実の親と思えだのと迫る。螢兵部卿官たちの懸想ぶりを楽しんでいた源氏は、自身も単なる傍観者たりえなくなる。玉鬘に対する恋心を紫上に察せられたと感じた源氏は、

心のうちに、「人の、かう、推し量り給ふにも、いかゞはあべからん」と、おぼし乱れ、かつは、ひがくしう、けしからぬ、わが心の程も、思ひ知られ給うけり。(胡蝶409)

と語られる。ここには僅かながらも好き心に対する反省の色が見える。源氏はその後ことある毎に玉鬘の許に渡り、和歌の贈答をしたり、心の内をほのめかしたりした。しかし、玉鬘の苦惱ぶりを見て、源氏は反省し「これよりあながちなる心は、よも、見せたてまつらじ」と自制するのであった。

まして、かやうなるけはひは、たゞ、むかしの心ちして、いみじう哀なり。わが御心ながらも、「ゆくりに、あはつきこと」と、おぼし知らるれば、いとよく思返しつゝ、人も、「あやし」と思ふべければ、いたう、夜も更かさで、出で給ひぬ。(胡蝶412)

ここには、昔の一途な情熱はなく、感情や行動を抑制する源氏の姿が見られる。

玉鬘に対する源氏の懸想は、類似した秋好中宮との事件と対比し

ながら語られ、その恋愛事件が一回限りの性格を持つものではなく、秋好中宮・朝顔君・筑紫五節・引いては若菜巻の臘月夜に至る一連の回顧的懸想の一に位置することを示している。^{注8)}

さるは、「まことに、ゆかしげなきさまには、もてなしはてじ」と、おとゞは思しけり。なほ、さる御心癖なれば、中宮なども、いと、うるはしくや思ひ聞え給へる。ことにふれつゝ、たゞならず、きこえ動かしなどし給へど、やむごとなき方の、及びなくわづらはしさに、おりたちあらはし聞えより、給はぬを、この君は、人の御さまも、けぢかく今めきたるに、おのづから、思ひ忍びがたきに、をりく、人見たてまつりつけば、うたがひ負ひぬべき御もてなしなど、うちまじるわざなれど、ありがたく思返しつゝ、さすがなる御なかなりけり。(螢425)

「さる御心癖」は、帚木巻で語られた「まれにはあながちにひき違へ、心づくしなることを御心に思しとゞむる癖」(帚木55)を受けており、現在でも依然としてあの好き心が存在している事が、源氏の心話文や地の文で語られる。しかし、疑惑を持たれそうな態度は「ありがたく思返し」で自制する。過去の好き心と、現在の年令相応な分別心・自制心が微妙に混ざり合って、思返し反省している場面である。

夜更けて玉鬘の許で和琴を弾いた源氏は、彼女の美しい姿を見るにつけ、彼女の処遇を色々と思索する。しかし、源氏は玉鬘を思い切れずに煩悶する。

わたり給ふ事も、あまりうちしきり、人の見たてまつり答へべき程は、心の鬼におぼしとゞめて、さるべきことをし出で

、御心の通はぬをりなし。たゞ、この御ことのみ、あけくれ、御心にはかゝりたり。「なぞ、かく、あいなきわざをし、安からぬもの思ひをすらむ。さ思はじ」とて、心のまゝにもあらば、世の人のそしり言はむ、事の軽くしき、わがためをばさるものにて、この人の御ため、いとほしかるべし。限りなき心ざしといふとも、春のうへの御おぼえに、ならばばかりは、我が心ながら、えあるまじく思し知りたり。(常夏20)

玉鬘に対して気の毒な思いをさせたくはないと世間を気にする源氏、彼女を愛した所で紫以上の待遇は出来まいと諦める源氏である。それなら、いっそのこと「宮、大将などにやゆるしてまし。さて、もて離れ、いざなひとりてば、思ひも絶えなんや」とまで思案する。しかし、美しさのいや増す彼女を見るにつけ、「さてもえ過ぐしやるまじく思しかへ」すのである。

さば、また、さて、こゝながらかしづきすゑて、さるべき折に、はかなくうちしのび、ものをも聞えて、なぐさみなむや。

(常夏21)

と、源氏の心は揺れる。六条院に玉鬘を置いたまま婿を通わせることにして、しかるべき機会に忍んで逢おうかと苦慮するのである。玉鬘に対する源氏の心は、この様に未練と諦めとの間を大きく往反して果てしない。

篝火巻、源氏は、内大臣が充分調査もせず近江君を引き取り、気に入らぬからといってはしたなく取扱うのを、非難する。そんな事を聞くと、玉鬘も「なまじつか実父に引き取られなくて却って幸せであった」と、源氏の下心に困惑しながらも、彼の情愛に次第にう

ちとける様になってきた。

にくき御心こそ、そひたれど、さりとて、御心のまゝにおしたちてなど、もてなし給はず、いとゞ深き御心のみまさり給へば。(篝火39)

ここには、玉鬘への恋情を自制して無理な行動に出ぬ源氏が語られているが、もはやそういう行動が取れない所まで来てしまったと解釈するべきだろう。

源氏の煩悶は複雑である。内大臣は何事も曖昧のままには済ませることが出来ぬ格式ばった気性の人なので、玉鬘を妻とした時の煩わしさを、源氏は想像しないではいらなかった。

「をこがましうもや」なども、思しかへさふ。(行幸67)
婿君として公然とした扱いをされた時の世評を気にして反省する源氏であった。

冷泉帝の大原野行幸を見物して帝の美しさにひかれた玉鬘に、源氏は宮仕を勧誘する。宮仕前に装着をと急ぐ源氏は、三条宮に大宮を見舞い、玉鬘を引き取った経緯を、何かのゆきちがいが、とぼかして巧みに語った。源氏は大宮の招きで来邸した内大臣と年来のわかまりをといて昔語りをし、玉鬘の件を告白して装着の腰結役を引き受けさせた。かくして、装着の日の夜、内大臣と玉鬘の劇的な親子の対面は実現するのであるが、玉鬘の素性が明らかになると、懸想人の思いは複雑に揺れ、内大臣の君達も「さま異なる、おとゞの御好みどもなめり」と、娘の様に養いながら人に心を尽くさせる源氏の好き心を批評し合う。こうして玉鬘をめぐる求婚譚もいよいよ終局を迎えるのである。

藤袴巻、夕霧は玉鬘を訪問する。源氏の命令で勅旨を伝えに来た

のだが、彼は玉鬘恋しさの余り、伝言以外の消息を作って彼女に接近する。源氏へ復命に立ち戻った夕霧は、玉鬘の処遇について鋭く源氏に問い詰めた。宮仕するにしても各地位が定まった後宮内に玉鬘が入る事の不都合さを指摘された源氏は、

すべて、かゝる、事のこゝろ苦しさを、みすぐさで、あやなき、人のうらみ負ふ、かへりては、かるくしきわざなりけり。(藤袴105)

と答える。夕霧に痛い所をつかれた源氏は以下作爲の弁解を試みるが、ここで吐露されている苦渋は彼の本音であろう。

源氏の「思し返しつ」反省する心は、地の文にも源氏の会話文にも見られ、外面内面両方から現在の源氏のためたう心として捉えられている。この遅疑逡巡し、たゆたう源氏は、老いて結局行動の出来なくなつた源氏、昔と異なる今の源氏を強調することになる。

作者は、老いの自覚を光源氏の意識の内面の変化としてのみ捉え、第三者的に外から捉える場合は「若く清げな」人物として終始設定した。しかし、かつての様な冒險心を抱きながらも実際には行動出来ない光源氏像を、外面からも内面からも描くことによつて、光源氏の変貌を描いた。外からは「若く清げ」だと描写しながらも、その実、光源氏からかつての行動力を剝奪していったのである。

五、若菜巻へのつながり

夕顔の娘玉鬘への源氏の懸想は、六条御息所の娘秋好中宮、昔の女性朝顔君・筑紫五節、紫のゆかりとしての女三宮への懸想^①といふ一連の回顧姿勢の中に位置付けることが出来る。特に、秋好中宮

・玉鬘・女三宮は、光源氏の昔の記憶に連る愛人のゆかりであり、ゆかりの問題は物語を長篇化する手法として「源語」の基底となっているものであった。だから、女三宮の登場は、玉鬘への懸想という前例を踏まえてこそ大きな意味を持つてくる。そこで、今迄見てきた老いと若さの描き分けが、若菜巻以降にどの様にかかわってくるかについて、簡単に触れておきたい。

女三宮の婿選びの段で、夕霧の次に源氏が候補者として話題にする。源女房達の「いと、目もあやにこそ、清らに物し給ひしか」という源氏評を聞いた朱雀院は、

まことに、かれは、いと、さま殊なりし人ぞかし。今は又、

その世にもねびまさりて、「光るとはこれをいふべきにや」と見ゆる匂ひなん、いとゞ、加はりたる。(若菜上218)

と、源氏を一方ならず讚美する。①は過去の光源氏の讚美、②は現在の光源氏について讚美したものである。しかし、②の把握は正しいであろうか。既に、玉鬘十帖の光源氏には若さの反面、老いが強調されている事を見つけた。朱雀院のこの源氏讚美は、現在の源氏の変容しつつかある姿を見誤つたものであり、朱雀院の錯誤といえる。この朱雀院の錯誤によつて、女三宮の源氏への降嫁は実現したのであるが、一方源氏の側にもその責任はあった。朱雀院が「夕霧が独身でいた間に、進んで申し込むべきであった」と後悔しながら語った時、源氏は「夕霧は実直だが、未熟で思慮も行き届かぬ」として退け、

かたじけなくとも、深き心にて、後見きこえさせ侍らんに、

おはします御蔭にかはりては、おぼされじを。たゞ、行くさき短くて、「つかうまつりさす事や侍らん」と、うたがはし

きかたのみなん、心苦しく侍るべき。(若菜上237)

と自己推薦して、女三宮の後見を承引したのである。「たゞ行くべき短くて」と老いた自らの境遇を懸念しつつも、なお源氏をして承引せしめたものは、藤壺のゆかりとしての女三宮に対する好き心であった。老いの意識の中に巣くっていた源氏の好色心「人をゆかしく思したる心」が、降嫁を引き承けるのに踏み切らせたのである。老いは若さの後に訪れてくるものではないだろう。つまり、老いは若さが変化して出来るものではなく、若さとは全く別のものとして源氏の心の奥に生まれ始めたものだろう。そして、この二つの要素が混在する中で、微妙に揺れ動く好き心が、今まで見てきた様な行動を源氏にとらしめることになったのである。

注1本文は「日本古典文学大系」に依る。但し、会話文・心語文等の括弧は適当に改めた所がある。番号はページ数を示す。

2過去の女性を再び呼び起こしてきて源氏の懸念の対象にするという構想は、秋好中宮の場合も同様である。彼女は賢木巻で再登場を約束され、霽標巻・薄雲巻で源氏の懸念の対象となっている。源氏は彼女に対しても、年齢の自覚・老いを語っている。

3「三年のあなた」は河内本「みとせ」、青表紙諸本「みそとせ」とする。古来様々な異説がある所であるが、大別して次の三つになる。①「みそとせ」に依り「源氏が生まれてからはや三十年を経過した」とする説(日本古典全書) 或いは「長い月日が経った感じを『三十年のあなたになる』という諺があった」とする説(玉上琢弥「源氏物語評釈」) ②「みとせ」に依り「源氏が須磨より帰京してからの五年間(みとせのあなた)」とする説(河海抄、花鳥余情) ③「とせ」の誤写として「桐

壺院崩御より現在まで十年」とする説(玉の小櫛補遺、日本古典文学大系)

今、②に従っておく。

4玉上琢弥「源氏物語評釈四」276ページ

5今井源衛「光源氏」(日本文学昭31・9、「源氏物語の研究」(昭37・7)所収)氏は、光源氏の性格を「すき」「まめ」及びこれを基とする名詞・形容詞・動詞等の用語例を調査して、「光源氏の『すき』は朝顔巻以後きわめて少い」ことを検証された。また、「(光源氏の)『すき』が、その壮年期以後過去の回想以外には全く見えなくなる」と述べられている。朝顔巻以降の「すき」の減少は、源氏が老いて好き心が衰退した事・行動力が鈍った事と関係してくるだろう。

6五節の舞の日、筑紫五節を思い出して消息した「消息文」の場合もある(乙女309)

7伊藤博「紫式部ノオト」その一「出生年時と老いの意識」(文学論輯19昭47・3)は、「平安時代人にとって、老年の一般の道標は賀宴によつて長寿を祝われる数え年四十歳であった」とする。

8大朝雄「源氏物語の構造についての試論」——玉鬘をめぐって——(文芸研究38昭36・6)

——四国女子大学講師——